2023 年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」　６月号

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

お知らせ

- ✧ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。
  １０：１５～１０：５０　**地下フェロシップホールにて**
- ✧ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。
- ✧ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

ショートメッセージ動画はインターネット上でも視聴できます。
10：15 のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと思われる方など、ぜひご活用ください。

教会ホームページを開いて、
下の方へ進むと・・・

「礼拝と教会学校」というコーナーの「毎日のみことば、聖書教育」と書かれたところをクリックしてください。
直近３週分の動画が表示されるので、見たいものをクリックしてください。

こんなページが開きます。
画像をクリックすると、再生が
始まります。

第１０課「主の名を呼び求める者は」

聖書箇所：ローマの信徒への手紙 10 章 5-13 節
主題聖句：「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。（10：13）

今週の聖書教育誌の週題は「主の名を呼び求める者は」です。
私たちの常盤台教会にはミッション・ステートメントがあります。そのなかの第 2 項に「**主にあって招かれるすべての人々と共に神の恵みに与り、互いに愛し仕え合います。**」と表明しています。

ミッション・ステートメントには、教会の存在意義、使命、夢が描かれています。すなわち、それは教会のすべての活動を意義づける根拠であり、道標であり、価値であり、立ち返る原点ともなり得ます。
それは決して人間の側の望むことを実現しようとするものではありません。いつの時代にあっても神のみ心に聴き、誠実に仕えようとしていくものです。神のみ言葉を私たちに都合の良いように理解したり、形骸化しないようにするものです。

使徒パウロが書いたこの手紙には他の手紙にはない特徴があります。第一に神学的に整えられた内容であること。第二にイスラエル(ユダヤの民)について「律法主義」から解放する神の愛が示されています。
パウロにとっては望む訪問が実現していないローマ教会に宛てた手紙でしたから、正しく「キリストの福音」を伝えることに重きをおいています。他方でイスラエルの民に対しては「律法のわざによる義」ではなく「信仰による義」により救いが実現すると述べているのです。

当時のローマは世界の中心であり、そこにあるローマ教会は異邦人伝道の中心となりうる存在でした。その世界宣教に際して、正しく「キリストの福音」を伝えることが最も大切な使命でありました。しかし、課題もありました。当時において克服するべき重大な問題はユダヤ教から改宗した「ユダヤ主義的キリスト者」たちが影響を与えた「ほかの福音」に対してでした。

ローマ 10:2～3
わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

イスラエルの民(ユダヤ主義的キリスト者)にとって、自分たちは神から選ばれた民であり、神から与えられた律法への服従をすることで神との正しい関係に与ると考えていました。そのように旧約の時代からの信仰の解放はキリスト者となった彼らでも容易なことではありませんでした。それは十分に理解できることではあります。パウロは旧約の時代から「信仰による義」と「すべての民を救う」という道を神は開いておられたことを旧約の預言者の言葉を用いて彼らのために語り伝えるのです。

レビ 18:5
わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる。わたしは主である。

人は神の律法を守ることができるのであれば、それは正しく神の救いの恵みに与ることができます。しかし、主イエス・キリスト以外に誰一人として願い行おうとしてもできませんでした。それは人は神の前に不完全な存在であり、決して神の完全性を満たすことはできないからです。律法において救いは人間の側の罪により実現できなかったのです。では、なぜ神は律法を与えられたのでしょうか。それは人が神との正しい関係を知るためなのです。

申命記 30:11～14
わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

パウロはここで、旧約の申命記から神の律法(み言葉)は遠くにあって、近寄りがたいものではなく、むつかしいものでもないと語っています。神の愛は「あなたの口と心」にあるのだから心で信じて、口で告白して公に言い表すことで救われると「信仰による義」について語っています。

そして、主イエス・キリストの十字架と復活により「律法主義」が終わりとなったことを告げるのです。「律法主義」が終わるところに「キリストの福音」があり、もはやユダヤ人もギリシア人・ローマ人・異邦人(私たち)の間に区別も差別もありません。「**主にあって招かれるすべての人々**」が神の救いの前に一切の区別も差別もなく等しく神の恵みのなかにあるのです。私たちの常盤台教会のミッション・ステートメントはここに由来します。

これは「ユダヤ主義的キリスト者」が主張した「ほかの福音」からの自由でもあるのです。彼らにとり異邦人(私たち)も神の前に等しく同じであることを説くのです。このように、いつの時代も差別や区別や律法主義がいつの間にか私たちの間に入り込んで惑わせます。そのようなことが起きないように。また、立ち向かえるように常にみ言葉に聴き従い続ける教会の群れであることを願っています。

イザヤ 28:16
それゆえ、主なる神はこう言われる。「わたしは一つの石をシオンに据える。これは試みを経た石 堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。信ずる者は慌てることはない。」
ヨエル 3:5
しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。主が言われたように シオンの山、エルサレムには逃れ場があり主が呼ばれる残りの者はそこにいる。

パウロはここでも旧約の預言者の言葉から主イエス・キリストを信じる者は慌てず失望に終わることがなく、主の御名を呼ぶ者は皆、救われると知らせるのです。
パウロはここで宣言します。「**主の名を呼び求める者はだれでも救われる**」

これは無条件に示された神の愛です。私たちはその唯一の真なる神を信じ、信頼して歩む民なのです。私たちは神に愛されている尊い存在なのです。

～分かち合い～
✧ 「律法主義」はいつでも私たちの信仰生活の中に入り込んできます。そのような体験があれば分かち合ってみましょう。
✧ あなたは「主よ」と呼びかけ祈った時に、どのような出来事が起こりましたか。

【言葉の解説】
「ほかの福音」
ユダヤ主義的キリスト者が主張して異邦人キリスト者を惑わせたもの。
人が義とされるのは「割礼を受けること」が不可欠であり、それは救われるには
人はみなユダヤ人にならなければならないとする考え方

（担当：郷　秀男）

6/4-10　今週の聖書日課

6月４日（日）ローマの信徒への手紙１０章５－１３節

5 モーセは、律法による義について、「掟を守る人は掟によって生きる」と記しています。 6 しかし、
信仰による義については、こう述べられています。「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはなら
ない。」これは、キリストを引き降ろすことにほかなりません。 7 また、「『だれが底なしの淵に下る
か』と言ってもならない。」これは、キリストを死者の中から引き上げることになります。 8 では、
何と言われているのだろうか。
「御言葉はあなたの近くにあり、
あなたの口、あなたの心にある。」
これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。 9 口でイエスは主であると公に言い表
し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。 10
実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。 11 聖書にも、「主を信じる者
は、だれも失望することがない」と書いてあります。 12 ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべ
ての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。 13「主
の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

1980 年 11 月、ラスベガスで伝道者ビリー・グラハムは伝道集会を数日間開催しました。集会が終わった翌日、同市内のあるホテルで火災が発生、炎は瞬く間に広がり大勢の方が犠牲になりました。そんな中で救助された人々は、前日まで伝道集会が行われていたコンベンションセンターに避難しました。ビリーも被災された方を慰め励ましました。ある方がビリーのところへ来て「主イエスを救い主と受け入れなければならないと強く感じましたが決断できませんでした。大火の中から救われて、今ここで私の救い主であると告白します。」と涙ながらに告白したそうです。

6月５日（月）創世記１５章６節

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

神さまはアブラムに大いなるご計画を示されます（15：1～）。星空を見せ「あなたの子孫はこのようになる。」と言われました。アブラムは神さまのみ言葉を理解できず、問いかけをしますが、神を信じ、示されたご計画を喜びます。このアブラムの信仰を神さまは義と認められました。

6月６日（火）申命記３０章１１－１４節

11 わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。 12
それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞か
せてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。 13 海のかなたにあるもので
もないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、
それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。 14 御言葉はあなたのごく近くにあり、あな
たの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

聖書のみことばは、私たちの生活とかけ離れたものではありません。上空や海底にあり取りに行くのが困難なものでもなく、私たちのごく身近かにあります。いつでも手を伸ばせば届き、心で信じて口で告白すれば恵みの中に招かれ喜びが与えられます。「難しすぎるものではない」のです。

6月７日（水）コリントの信徒への手紙Ⅰ　１２章１３節

つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろ

うと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

一人ひとりは違っていても、神によって生かされているという一点においては、私たちはひとつとされています。同じになろうとするのではなく、それぞれの違いを大切にし、主にある一致のもとにある共同体を神さまは祝福してくださいます。「みんなちがってみんないい　金子みすゞ」

6月8日（木）イザヤ書５９章２１節

これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると
主は言われる。
あなたの上にあるわたしの霊
あなたの口においたわたしの言葉は
あなたの口からも、あなたの子孫の口からも
あなたの子孫の子孫の口からも
今も、そしてとこしえに
離れることはない、と主は言われる。

すごい熱意をもって始めたこと（仕事、趣味、習い事など）なのに、最後まで終わらせることができないということを経験したことはありますか？「残りはあとでやろう」「疲れたからちょっとコーヒーを飲んでから」…そしてそのまま放置してしまったり。神さまは私たちと結ぶ契約はいつまでも変わることはないと力強く語っておられます。疲れたからそのまま放置したり、あきらめたりしてしまう…神さまがそんな方じゃなくてよかったと思いませんか？

6月9日（金）ローマの信徒への手紙９章５節

先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

桜のようにすぐ散る花も美しいですが、柏の木の葉は散りません。真冬の強風が吹き荒れても、新芽が出るまで決して葉を落とさないのです。子を守る親の強さをイメージし、子どもの日に柏もちを食べる習慣ができたそうです。私たちの神さまも、主イエスを信じて、神の子とされ義とされた私たちを絶対に見捨てないお方です。

6月１０日（土）ガラテヤの信徒への手紙５章１３節

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。

与えられた自由を罪のために用いるのではなく、愛において仕えるために用いよ、と言っています。自由とは元来「奴隷ではないこと」を意味しており、二度と奴隷の軛につながれることなく、神の恵みのもとで自由を受け入れ、神さまの招きに応答して生きるように勧めています。

（担当：宇佐美　典子）

第１１課「神の秘められた計画」

聖書箇所：ローマの信徒への手紙 11 章 25-36 節
主題聖句：ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。
だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。(11:33)

本日の箇所の少し手前で、パウロは自らを「異邦人のための使徒」と名乗っています。(11：13)
イエスさまの十字架と復活によってもたらされた救いは、ユダヤ人のみならず世界中全ての人に及ぶ、という熱い思いがパウロを世界伝道へと駆り立てました。これは、イエスさまの「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。」（マタイ 28：19）という大宣教命令に適う行いです。それから約 2 千年、遠い日本の片隅で、今私たちがこうして礼拝をしたり、共に聖書を読んだりしていることは、パウロにしてみれば夢のような話でしょう。

当時、ユダヤ人の中には神さまが自分たちの民をこそ救ってくださるはずだ、という思いや、律法に従わなければ救われない、といった思いから、イエスさまの教えを受け入れられない人が多くいました。他ならぬパウロも、かつてはその一人でした。また、イエスさまに従う思いはありつつも、やはり律法がネックになって、異邦人伝道には否定的な人もいました。しかしパウロは主によって回心を与えられ、イエスさまの御言葉を伝えていきたい、それも異邦人たちに伝えていきたい、と願い行動するものに生まれ変わりました。ですからパウロには「異邦人への伝道」と共に、「ユダヤ人への啓発」、つまり異邦人にも救いは与えられているのだとユダヤ人に伝えていくこと、という大きな 2 つの使命があったと言えます。

しかし今日の箇所は、その 2 つの使命がある程度達成されてきた時期だから生じる、パウロの第 3 の役割を表わしているように思います。言うなれば「異邦人への忠告」です。「うぬぼれないように」という言葉にもそれが表現されています。
パウロはまず、ユダヤ人の一部が頑なであることを認めたうえで、しかしそれは異邦人が救われるために必要な過程、神のご計画であったことを語ります。これは、頑なであった者たちが人間的に劣っているとか、特別に罪深いといったわけではなく、全ては神さまのご計画の中で定められたことである、という信仰から来るものです。実際、もし彼らが劣っているから救われない、と考えるのであれば、救われた者たちは「優れているから救われた」という考え方も成り立ってしまいます。そこには救いが神の憐みによってもたらされる、という視点が欠けており、その先に待つのはかつての律法主義のような「行いによって救われる」という考え方です。
11：5-6
同じように、現に今も、恵みによって選ばれた者が残っています。 もしそれが恵みによるとすれば、行いにはよりません。もしそうでなければ、恵みはもはや恵みではなくなります。

こうした危惧から、パウロは異邦人たちに忠告をするのです。自分を賢い者とうぬぼれてはいけない、一部のユダヤ人が頑ななのは、異邦人が救われ、そしてイスラエル全体が救われる上での神のご計画なのだから、と。またたとえ神に敵対していたとしても、「神の賜物と招きは取り消されない」（11：29）のであり、アブラハムを通して民全体に与えられた祝福も失われることはないと強調しています。

聖書を読んでいると、異邦人はどちらかと言えば被差別的な、弱者の立場に見えやすいので、このようなユダヤ人側をかばうような忠告が必要だった、ということに個人的には驚きを覚えました。しかし、異邦人たちの「自分たちは救いを得た」という思いが、頑ななユダヤ人を見下すという傾向は、確かにあったようです。

先日「フェイブルマンズ」という映画を観ました。かの巨匠・スティーブン・スピルバーグ監督が、自らの半生を描いた作品です。ユダヤ系である彼が高校に通っていた際、いじめっ子たちに「お前らがキリストを十字架にかけたんだろ！？」と言われるシーンがありました。ユダヤ系の方を悪く言う際の常套句だったようです。パウロの時代からあった見下し、差別意識が連綿と受け継がれ、悲しい形で結実したものと言えるでしょう。

私たちもまた、慢心には注意しなければなりません。ユダヤ人が自らを「神に選ばれた民」と捉えていたように、私たちも「選ばれた」という言葉をよく使います。神さまによって選ばれて教会に来ることができ、バプテスマを受けることができた、といったように。

神さまは、全ての人間が自動的に信仰を持つようには設計されませんでした。世の中に神を信じる者と、そうでないものが存在する以上、私たちが「選ばれた」と考えることは間違っていません。むしろ「勝ち取った」とか「到達した」とか考えるより、よほど謙虚な姿勢と言えるでしょう。

しかし、救われた喜びや、それまでの生き方が大きく変えられた感動などを伝えたい！という熱い思いが、気が付けば自分を立派な者のように錯覚させたり、いくら伝えても心を変えてくれない方に苛立ちを覚えたり、ということに繋がる危険にも注意を払わねばなりません。「“日本人”にはなかなか福音が伝わりづらいよね」といったような考え方に陥ったことは、ないでしょうか。私はあります。そのように人を大きな括りで捉えたり、自分と区別して見たりしている時点で黄信号だと、今日の箇所から思わされています。

私たちは確かに選ばれました。しかしそれは、自らの行い、能力、人格、知識などによってではなく、ただただ貧しく愚かな者への神の憐みによって、選ばれたのです。そしてそのような私たちに、イエスさまは「福音を伝えなさい」と使命をお与えになりました。まだ神さまと出会ってない方が多くいたり、様々な不条理や悲劇を前に神さま何故？と問いたくなったりする世の中ではあります。しかし、全ては神さまの大きなご計画の内であることを信じ、感謝と謙遜の思いを持って、それぞれに出来る働きを主に捧げてまいりましょう。

最後にもう１度、11：33 を心に刻みたいと思います。
ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

～分かち合い～

✧ 「あなたは神さまによって選ばれました」この言葉を前に、どのような感情になりますか。

✧ 「神の選び」によって、クリスチャンとして生きる者とそうでない者が分かれるならば、私たち人間が伝道に努めることは無意味なようにも見えます。このことを、あなたはどう考えますか。

（担当：郷　健人）

6/11-17　今週の聖書日課

６月１１日（日）ローマの信徒への手紙１１章２５－３６節

25 兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような秘められた計画をぜひ知ってもらい
たい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであ
り、 26 こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてあるとおりです。
「救う方がシオンから来て、
ヤコブから不信心を遠ざける。
27 これこそ、わたしが、彼らの罪を取り除くときに、
彼らと結ぶわたしの契約である。」
28 福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについ
て言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。 29 神の賜物と招きとは取り消されないものなの
です。 30 あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けて
います。 31 それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていま
すが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。 32 神はすべての人を不従順の状態に閉じ
込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。
33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し
尽くせよう。
34「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。
だれが主の相談相手であっただろうか。
35 だれがまず主に与えて、
その報いを受けるであろうか。」
36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にあ
りますように、アーメン。

不従順であったら罰せられてしまうと思うのが普通ですが、すべての人が憐れみを受けるために不従順の状態にされている。パウロに与えられた神さまの「秘められた計画」の一部分なのだと想像出来ますが、壮大ですね。

６月１２日（月）エレミヤ書３１章３３節

しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわ
ち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らは
わたしの民となる。

イエスさまを救い主とかたくなに認めず、旧約の教えに従い神さまへの信仰を続けている（現ユダヤ教の）方々には来るべき日に救いが約束されていると記されています。私たちには心を開き、イエスさまを受け入れることで同じように救いが約束されています。

６月１３日（火）マタイによる福音書９章３６節

また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。

私たちが何度神さまから離れ、好き勝手をして弱り果て、打ちひしがれようともイエスさまは私たちを憐れんで下さいます。本当に優しく、愛にあふれる主であることが感謝ですね。

6月１４日（水）ヨハネによる福音書２１章２５節

イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。

何とか書けるだけ書いて欲しかったですけど、ヨハネをはじめ、多くの著者が主から言葉を受け、神さま、イエスさまのことを理解できるように上手にまとめて下さったおかげで、私たちは聖書を通して御言葉を聞くことが出来ています。

6月１５日（木）ローマの信徒への手紙６章８節

わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。

この御言葉を実感できるようになれば、死は怖いものではなくなりますね。 人生のみの命から、人生を送った後も神の国で過ごしていける命に代えて頂くためにも必要なことなのではないでしょうか。

6月１６日（金）ローマの信徒への手紙７章４節

ところで、兄弟たち、あなたがたも、キリストの体に結ばれて、律法に対しては死んだ者となっています。それは、あなたがたが、他の方、つまり、死者の中から復活させられた方のものとなり、こうして、わたしたちが神に対して実を結ぶようになるためなのです。

この聖句は「その結果、文字に従う古い生き方はではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです。」（７：６）とまとめられています。イエスさまを受け入れ、私たちに一人ひとりに与えらる御霊によって木であるイエス様と繋がり、実をつけることが出来る

6月１７日（土）ローマの信徒への手紙８章１４－１７節

14 神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。 15 あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに
陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」
と呼ぶのです。 16 この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒にな
って証ししてくださいます。 17 もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリ
ストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

「キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」、キリスト教への弾圧は現在でも世界の国や地域で起こっています。多くの苦しみが生まれています。この御言葉は救いですね。

（担当：栗山　義亜）

第１２課「わたしに与えられた恵みによって」

聖書箇所：ローマの信徒への手紙 12 章 1-8 節
主題聖句：「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渇いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。（12：20-21）

読み進めてまいりましたローマの信徒への手紙も 12 章になりました。12 章からはキリスト信仰者の生き方についての考察に移ります。ここまでの神学的展開を基にして、具体的な勧告をパウロは述べています。12 章 1 節～2 節は勧告部分の中心的主題を提示し、3 節～21 節は信仰者の個人的倫理について書かれています。
1 節～2 節の「こういうわけで」は、これまでの長い議論を前提にして、これから勧告がなされることを意味しています。そして、勧告そのものが「神の憐れみによって」圧倒的力を持ち、信仰者のあるべき姿を表す献身について語ります。

1 節後半の「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたのなすべき礼拝です。」は、現代に生きる私たちが実行できる御言葉として、素直に受け取ってもよいのではないかと思います。なぜならば、この箇所はより深く解釈していく自由も同時に与えられていると思われるからです。万人祭司という考え方の聖書箇所としても用いられます。
聖書の語る献身とは、「牧師」「宣教師」に限ったことではありません。つまり聖書には、「牧師」「宣教師」が献身者です、という記載はなく、誰もが献身者になりうるのです。
「礼拝」をお捧げすることを第一のご奉仕と考え、宣教者を通して語られる神さまの御言葉を感謝して受けるその姿勢こそが「献身」であると思われます。

2 節以降を見てまいりましょう。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。」とあります。私たちは、この世に歩調を合わせるのではなく、神さまに仕える生き方というものが大切であり（1 節）、そのことを主が望まれていることを知るべきであろうと思われます。献げられた人間としての人間性を、神はご自身の在り様と意思と力によって、この世で迷い続ける私たちをも、変えてくださるのだと思います。

3 節からは、パウロによる新たな勧告が始まります。一地方の教会にではなく、全ての教会に見られる普遍的課題に対して書き記します。「わたしに与えられた恵みによって」（神からの賜物を授かった使徒として）パウロは語ります。
「自分を過大に評価してはなりません」は、第一コリント 4 章 6 節の「だれも、一人を持ちあげてほかの一人をないがしろにし、高ぶることのないようにするためです。」からの引用です。そして、人間の取るべき態度は、信仰の度合に応じて慎み深く評価すべきであり、かけ離れた霊的信仰に依らず、教会生活に深く根差した秩序と配慮を守ることが大切であると、語っていると思われます。

5 節に「キリストに結ばれて一つの体を形づくっており」とあるように、私たちは、一人ひとりに与えられた霊による賜物を受け、それぞれの責任を果たすべきであると思います。6 節の「預言の賜物」とは、この聖書の時代は「異言を語る」という賜物を授かった者を、パウロは霊的な力により働きをする者（使徒、預言者、教師、奇跡を行う者・・・）として、重んじていたと言われています。
教会における様々なご奉仕は、私利私欲を捨てて相手の身になって事にあたる誠実さ、熱心さが求められていました。それは現代においても変わらない、積極的に快く行うという命題であると思います。難しくも用いられる喜びを与えられる時、であるでしょう。

9 節～21 節では、「キリスト教的生活の規範」という見出しがついておりますが、「賜物としてのキリスト教的生活」が書かれていると考えた方がよい、という見解がなされています。なぜならば、愛こそが霊の賜物であり、ここではその賜物としての愛が、具体的に語られており、永遠の時間概念ではない終末意識に立つ教会おいての信仰者が、どのように生きるべきかが語られています。書かれている内容に統一性を見出すことは難しいとされておりますが、様々な背景を持つ勧めが語られ、リズムよく形式的統制が取れています。

9 節後半から 13 節までに 12 の勧告が並び、信仰者が神の恵みの下、教会でどのように過ごすべきであるかが語られます。9 節の「悪を憎み、善から離れず」という勧めから 10 節の「尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」までは、他者に対する単なる愛ではなく、ある背景において相手を尊敬し、なお且つ相手に仕えるという関係性として成立していると考えられています。
12 節では、信仰者の生活が終末論的な意味合いをもって語られます。13 節は、当時の教会の社会的状況と結びついた表現として語られ、「聖なる者たちの貧しさ」とは、一般的な貧しい信徒たちを意味していると言われています。教会は生活困窮者を多数抱え、そのような人々に対する責任を使命と考えていたようです。

14 節は、イエスの言葉伝承が背景にあり、マタイ 5 章 44 節の「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」と一致しています。15 節は 14 節の「呪ってはなりません。」という呪いの連鎖を神の豊かさによって断ち切り、神からの賜物による責任の具体化を語ります。共に喜び、共に泣くは、単なる心理的レベルの共感ではなく、真に共に生きるという意味です。

16 節の「自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。」は、3 節の「自分を過大評価してはなりません。」と同じ表現です。パウロは「神から賜った恵み」の下、奉仕者としてキリスト者としての思いを、常に一致させていることを語っていると思われます。
「身分の低い人」は「取るに足らない務め」とも訳されます。ここでは「取るに足らない務めに仕える」人々という観点から評価することはせず、強者、弱者、有用な者そうでない者というような価値観を否定する、という意味として読むことができます。

17 節～21 節は、終末時の迫害の時代における報復の問題、という大きなテーマについての勧告が語られています。19 節の「自分で復讐せず」は、レビ記 19 章 18 節の「復讐してはならない」からの引用で、「わたしが報復する」は、申命記 32 章 35 節の「わたしが報復し、報いをする」からの引用です。続く 20 節は、箴言 25 章 21 節～22 節の「あなたを憎む者が飢えているならパンを与えよ。渇いているなら水を飲ませよ。こうしてあなたは炭火を彼の頭に積む。そして主があなたに報いられる。」からの引用です。
引用の箴言の「渇いている」の言葉も、20 節の「渇いているなら」も、ヨハネ福音書の 19 章 28 節の「イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り『渇く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。」を想起させます。

21 節の「悪に負けることなく」は、マタイ福音書の 5 章 39 節の「わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」というイエスの言葉を、パウロは用いたと思われます。悪の連鎖を断ち切り、善の連鎖を始めることがキリスト者としてのあるべき姿であり、迫害への報復の道を歩まず、愛の勝利の道を歩むことを語ります。

現代に生きる私たちは、メッセージをどのように受け取ればよいのでしょうか。
イエスの語った「渇く」は、私たちのすぐ傍に、隣に、気づかぬ時にも、ふとすれ違う瞬間にもイエスさまは居られ、私たちが信仰をもって生活する全てをご存じでいてくださる、ということだと思います。そして記憶の中の悲しみや辛さ、痛みや怨み・・・を、イエスさまは癒してくださいます。主に全てをお委ねし心からの奉仕と、祈りを捧げる時、お赦しくださり、栄光の道へとお導きくださることでしょう。

～分かち合い～
✧ 皆さまは、祈りの力を心から信じることができていますか？

（担当：岩崎　秀子）

6/18-24　今週の聖書日課

6月１８日（日）ローマの信徒への手紙１２章１－８節

1こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる
聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。 2あなたが
たはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心で
あるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。
3わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなり
ません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。
4というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働き
をしていないように、5わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、
各自は互いに部分なのです。 6わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を
持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、 7奉仕の賜物を受けていれ
ば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、 8勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをす
る人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

「私には賜物が無いので」と謙遜されて言われた方がおられますが、預言や奉仕、教える、勧める人、施しをする、指導する、慈善を行う人のように、表だった賜物の他、目に見えないお祈りや傾聴、お証や交わりなど一つの体を作るのに大切な、細部の繋ぎ目のような陰のお働きを担って下さっている方々もおられます。どの方も邁進されておられるお姿に何時も励まされております。

6月１９日（月）マタイによる福音書５章４８節

だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

完全を調べてみましたら、条件、要素などがそろっていて、不足や欠点などがないさま、とありました。私にはとても無理どころか反対？と思いました。が、私たちは清められた罪人で主のものとされたのですから、召されるその日まで一人一人主の望むようになり清めていただけると信じて、希望を持って(祈りつつ)主を見上げて歩んで参ります。

6月２０日（火）ローマの信徒への手紙１２章１０節

兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。

私たちは上部だけで判断されてしまうことがあり悲しく思う時もあります。(逆に知らないうちに傷付けてしまっているかもしれません。)ですが、神さまが私たちの内も外も見て下さっていて、丸ごと愛していて下さることを知っていますので私たちは幸いです。神さまを信じた私たちは全ての人が神さまによって愛され、創造された方々であることを知っていますので、お互いを愛し尊敬することの大切さをしみじみ感じ教えられます。

6月２１日（水）ローマの信徒への手紙５章１８節

そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。

アダムの不従順によって人類全体に罪が入り込み有罪とされましたが、神さまは憐れみ深くそのまま放っておくことはなさいませんでした。ご自分の貴いひとり子を私たちの罪の救いのために十字架につけて、罪のない清い血を流され贖って下さいました。それによって私たちは神さまとの関係が義とされて新しい命に生きる者とされました。又永遠の命(神さまとの人格の交わり)へと導かれていることを感謝いたします。

6月２２日（木）ローマの信徒への手紙１章１６節

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

福音を全く必要無いと思っている人にとっては絵空ごとでも、ユダヤにもギリシャ人にも広がって、いまや世界中の人にとって、信じる人には救いをもたらす神さまの力です。イエスさまを信じた時に心の中に起こった温かい物、静かな平安、救いを信じるまでに起こった様々な物語、信じてから今もある神さまからの語りかけや出来ごと、一人一人皆違うけど皆生きた神さまのお導きご配慮です。感謝いたします。

6月２３日（金）コリントの信徒への手紙一１６章１－４節

1 聖なる者たちのための募金については、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも実行しなさい。 2 わたしがそちらに着いてから初めて募金が行われることのないように、週の初めの日にはいつも、各自収入に応じて、幾らかずつでも手もとに取って置きなさい。 3 そちらに着いたら、あなたがたから承認された人たちに手紙を持たせて、その贈り物を届けにエルサレムに行かせましょう。 4 わたしも行く方がよければ、その人たちはわたしと一緒に行くことになるでしょう。

週の初めの日にはいつも各自収入に応じて、いくらかを取り分けておくように言われます。「献金を感謝します。」と献金袋に用意していた日々が一転して、コロナ禍ではネット振込になりボタンを押す行為に変わりました。明細内容を送信しそびれ、ご迷惑をおかけしたことも。教会でもネット礼拝により世界に広がった信徒の皆さまと共に、お祈りと献金を主よ清めていく倍まして主の御業のためのに御用い下さいますようにとお祈りいたします。

6月２４日（土）イザヤ書５２章１３－１５節

13 見よ、わたしの僕は栄える。
はるかに高く上げられ、あがめられる。
14 かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように
彼の姿は損なわれ、人とは見えず
もはや人の子の面影はない。
15 それほどに、彼は多くの民を驚かせる。
彼を見て、王たちも口を閉ざす。
だれも物語らなかったことを見
一度も聞かされなかったことを悟ったからだ。

貴いイエスさまを通しての救いの業は正確に達成されます。ですが、そのお姿は見るに耐えられないほど痛めつけられて、お顔も全く変わってしまうほどのお苦しみで、王たちも口を黙ます。「驚かせる(＝飛び上がる)」の言葉に「喜んで飛び上がる。」「注がれる」の２つの意味があるそうです。「血が注がれて彼らを清める」「多くの国々を喜びで満たす」と理解されると、それは前代未聞の新しいことです。紀元前５世紀にこれが書かれたこと自体が私たちにとっての驚きです。

（担当：渡部　和子）

第１３課「キリストの福音をあまねく宣べ伝える」

聖書箇所：ローマの信徒への手紙 15 章 14-21 節（参照 15 章 22-23 節）
主題聖句：このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。（15:20）

4 月の半ばから読み進めてきたローマの信徒への手紙も、今日で最後となります。福音を異邦人に伝えることに力を注いでいたパウロは、当時世界の中心として栄えていたローマに行って伝道したいと強く願っていました。まだ見ぬローマの人たちに、自己紹介と、ローマを訪ねる理由、自分の信仰の姿勢について強く、熱く語っています。

15 節の「記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました。」という一文からもパウロの熱意が伝わってきます。しかし、思いを押し付けるだけではなく、ローマの人々が善意に満ちていること、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができると確信していると語りかけます。ただ、こうしろ、ああしろと命令される時、私たちはどう感じるでしょうか？　たとえ、それが正しいことだとわかっていても、反発したり、とりあえず従っておこうと、自分の頭で考え、自分の意志で行うことをやめてしまったりするのではないでしょうか？　しかし、相手が自分のことを認めてくれていることがわかった上で話を聞くときはどうでしょう？　相手の期待に応えようと努めるのではないでしょうか？ましてやパウロはローマの人々とは面識がないのですから、尚更です。パウロはローマに着いて伝道を始める前に、ローマの人々が、自分のこと、そして、自分が伝えようとしている信仰について知っておくことができるように、手紙を書いたのです。

パウロは自分の使命は、祭司として、福音を伝えることだと語ります。自分が神さまに用いられて、神さまの福音伝道のために働くことができることを、パウロは「恵み」と呼んでいます。

私たちも、奉仕をする時に、「恵み」「祝福」という言葉を使います。もちろん、奉仕させていただけることが恵みなのですが、奉仕を通して、自分が学び、成長できる、様々な出会いを与えられるなど、心のどこかで、自分にとってプラスに働くことを期待してはいないでしょうか？　もちろん、それも大切なことですが、パウロは、自分の働きの結果、自分に返ってくるもののことなど 1 ミリも考えず、神さまが自分を用いてくださる、自分の口や体を通して神さまが働かれる、そのことを恵み、誇りであると言っています。「キリストが私を通して働かれたこと以外はあえて何も申しません。」（18 節）というほど、異邦人への伝道の働きはパウロにとって大きな恵みだったのです。

神さまの力によって、パウロは、エルサレムからイリリコン州までめぐってキリストの福音をあまねく宣べ伝えました。イリリコン州というのはマケドニア以北のバルカン半島全域

を指すと言われています。つまり、ローマ帝国の東半分はすでに伝道したということです。エルサレムからイリリコン州までは約 2,400 キロ、北海道から九州までとほぼ同じです。

21 節の「彼のことを告げられていなかった人々が見、聞かなかった人々が悟るであろう」はイザヤ書 52 章 15 節からの引用です。イザヤ書 52 章 13 節では「わたしの僕は栄える」「あがめられる」と書かれています。しかし、その後、主の僕は苦難を受け、53 章ではその様子が克明に描かれています。パウロは、この部分を引用して、主のことを知らない人々に福音を伝えることが自分に与えられた使命であると語ります。心の中では、伝道することで自分が受ける迫害、苦難などを予想したことでしょう。しかし、聖霊に満たされたパウロは、そのような不安などものともせず、いえ、主イエス・キリストと同じ様に苦難を受けることもまた、祝福、恵みと思っていたに違いありません。

20 節には「キリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと」「他人の築いた土台の上に建てたりしない」と書かれていますが、これがパウロの宣教の方針です。既に誰かが宣教活動を行った所に行って、更に信仰者を増やすのではなく、まだ誰も宣教活動を行ったことがない所に行って、宣教の土台を築くのです。ある程度基礎が固まったら、その場所は他の人に任せて、別の場所に移っていくのです。

本日から神学校週間が始まります。パウロのように世界各地をまわって福音宣教することは誰にでもできることではありませんが、私たちのすぐ近くにも、神さまを知らない方は大勢いらっしゃいます。また、福音宣教の働きにその身を捧げようとされている方々をお支えすることも、大切な伝道のご奉仕です。

神さまが私たちを通して働いてくださること・・・それは、大きな祝福、恵み、誇りです。共に主の栄光にあずかりましょう。

～分かち合い～

✧ イエスさまのことを知らない人に、イエスさまのすばらしさを伝える時、何を大切にしますか? どのような工夫をしますか?

✧ 自分がパウロからの手紙を受け取ったら、どのように感じますか?

（担当：田中　由記子）

6/25-7/1　今週の聖書日課

６月２５日（日）ローマの信徒への手紙１５章１４－２１節

14 兄弟たち、あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができる
と、このわたしは確信しています。 15 記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころか
なり思い切って書きました。それは、わたしが神から恵みをいただいて、 16 異邦人のためにキリス
ト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。そしてそれは、異
邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれる供え物となるためにほかなりません。 17
そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。 18 キリス
トがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせ
るために、わたしの言葉と行いを通して、 19 また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれ
ました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣
べ伝えました。 20 このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わ
たしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。
21「彼のことを告げられていなかった人々が見、
聞かなかった人々が悟るであろう」
と書いてあるとおりです。

「彼のことを告げられていなかった人々が見。聞かなかった人々が悟るであろう」パウロの伝道がなかったら今日の私たちはないでしょう。そして、聖書は世界の各国の言葉に翻訳されて、たくさんの人々に読まれています。多くの方々がイエスさまを知り、心のよりどころとされています。私もその一人です。パウロの働きと神さまに感謝致します。今日から神学校週間です。常盤台バプテスト教会からも、石原兄が神学生として勉学にはげんでいます。応援しましょう。

６月２６日（月）コリントの信徒への手紙一１５章８－１０節

8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。 9 わたしは、神の教会を迫害し
たのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。
10 神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にな
らず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしでは
なく、わたしと共にある神の恵みなのです。

「働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」教会で多くの方々がご奉仕で働いておられます。その方々の恵みに私たちはあずかっています。礼拝、祈祷会…。教会で働かれている皆様。感謝致します。

６月２７日（火）使徒言行録１１章２４－２６節

24 バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人が主へと導
かれた。 25 それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、 26 見つけ出してアンティオキア
に連れ帰った。二人は、丸一年の間そこの教会に一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキア
で、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。

「バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人が主へと導かれた」この人は信頼できる。きっと、バルナバは温かいお日さまのような人物なのでしょうね。

6月２８日（水）ローマの信徒への手紙１５章３０節

兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、

昔、私の母が危篤で私の心は不安でいっぱいでした。牧師に「どうか、一緒に祈って下さい」とお願いをしたことがあります。そのお祈りは、神さまに届いたような気がしました。

6月２９日（木）ローマの信徒への手紙１６章２１節

わたしの協力者テモテ、また同胞のルキオ、ヤソン、ソシパトロがあなたがたによろしくと言っています。

みんながあなた方のことを思っています。常盤台バプテスト教会でも、あなたは一人ではない。みんながあなたのことを思っています。

6月３０日（金）ヨハネによる福音書１章１－２節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 2 この言は、初めに神と共にあった。

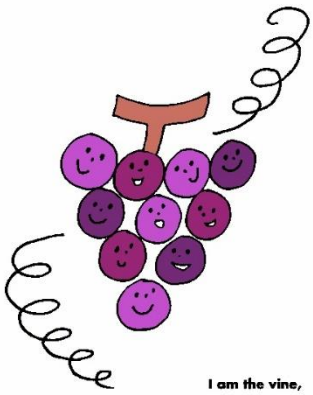
「始めに言(ことば)があった。言(ことば)は神と共にあった。言(ことば)は神であった」言(ことば)とは、何でしょう。それは「愛」だと思います。神は「愛」です。万物は言葉(ことば)「愛」によって成った。成ったもので言(ことば)「愛」によらずに成ったものは何一つなかった。世界は愛によって包まれています。神さま感謝致します。

7月1日（土）詩編１１３編1－3節

1 ハレルヤ。
主の僕らよ、主を賛美せよ
主の御名を賛美せよ。
2 今よりとこしえに
主の御名がたたえられるように。
3 日の昇るところから日の沈むところまで
主の御名が賛美されるように。

「日の昇るところから日の沈むところまで、主の御名が賛美されるように」主はすべての創造主。私の周りのすべてのものは、主がお造りになったもの。主よ、なんと素晴らしいことでしょう。お日さまも、空も、雲も、風も、木々も、葉も、花も、鳥も、移り変わる自然の風景も、美味しい食べ物も、そして、私を支えて下さる人々も。たくさんの恵みを与えて下さり感謝致します。主の御名を心より賛美致します。

（担当：小沢　敬一）



I am the vine,
you are the branches
John 15:5

2023.6 成人科